

新規事業における保有資源・強み弱み分析研究

多面的な資源棚卸しと新規事業との適合関係から、活用可能な強みと不足資源を整理する分析支援研究

Resource-Based Strengths and Weaknesses Analysis for New Business Development | Research Overview Version 1.0

研究・開発	FANDDF
研究区分	応用研究／分析支援システム試作
基礎理論・研究思想初出	原資料の作成履歴確認後に確定
研究着手日	原資料の作成履歴確認後に確定
基礎資料初出	原資料の作成履歴確認後に確定
個別研究・仕様初出	原資料の作成履歴確認後に確定
主要正本・現行参照 Version	棚卸_プロンプト生成付き_交点出力追加.xlsm
研究概要初版	2026 年 8 月 19 日

要旨

本研究は、クライアントが検討する新規事業について、本人・企業がすでに保有している資源を多面的に棚卸しし、その新規事業との適合関係から、何が強みとして活用でき、何が不足する弱み・補完課題となるのかを整理する方法を研究・試作したものである。

新規事業における強み・弱みは、本人が自覚している能力や、職歴・資格だけからでは十分に把握できない場合がある。長年の実務や生活の中で身につけた能力、保有設備、情報、人とのつながり、資金面の条件等が、特定の新規事業では重要な資源となる可能性がある。

そこで本研究では、一般的な職務経歴だけに限定せず、多面的な資源候補から保有資源を確認する方式を採用した。最終試作版では 10 カテゴリ・933 候補行を設定しており、重複名称を除くと 923 項目となる。資源候補には、職歴や各種資格のほか、人的、物的、財務、情報、組織・社会資源等が含まれる。

確認された保有資源と、クライアントが検討する新規事業との関係を生成 AI によって分析し、強み、弱み、事業との関連性、その根拠、事業化に向けた方向性等を整理する分析支援システムを試作した。

本研究の特徴は、「あなたの強みは何ですか」と最初に尋ねるのではなく、先に保有資源を広く確認し、その後、対象となる新規事業との関係から強み・弱みを再評価することにある。

キーワード：新規事業、経営資源、強み分析、弱み分析、資源棚卸し、事業適合性、生成 AI、事業開発

1. 研究背景・目的

新規事業を検討する際には、市場、顧客ニーズ、競合、価格、収益性等の外部条件を確認する必要がある。

一方、新規事業を実際に実行する主体が、何を経験してきたのか、何ができるのか、どのような設備や情報を利用できるのか、どのような資金条件にあるのか、どのような人・組織との接点を持っているのか、といった内部資源も、事業を実行するうえで重要な条件となる。

しかし、「自社の強み」「自分の強み」を直接尋ねるだけでは、本人がすでに強みとして認識しているものに回答が偏りやすい。特に、長期間繰り返してきた実務、生活の中で身についた能力、日常的に利用している人脈や設備等は、本人にとって当たり前であるため、新規事業へ利用可能な資源として認識されていない場合がある。

研究目的：強み・弱みを最初から自己申告させるのではなく、まず保有資源を広く確認し、新規事業との関係からその意味を捉え直す。

2. 研究の基本思想と理論的位置づけ

本研究では、「一般的に強みとされるもの」と「特定の新規事業において実際に強みとして機能するもの」は、必ずしも同じではないと考える。

資格や経験、人脈、設備等は、保有しているという事実だけで強みになるわけではない。その資源が、検討する新規事業において、事業の実行、顧客への価値提供、課題解決、運用負荷の軽減、不足条件の補完等へ利用できる場合に、その事業における強みとして意味を持つ。

逆に、多数の能力や資源を保有していても、対象事業の実行に必要な条件との間に不足があれば、その不足は弱みまたは補完すべき課題となり得る。

この考え方は、企業内部の資源と競争力との関係を扱う経営戦略論上の資源基盤視点（Resource-Based View：RBV）と親和性を持つ。ただし、本研究はRBVやVRIOをそのまま実装したものではない。

本研究の中核：新規事業を検討する段階で、本人・企業自身が資源と認識していない可能性のある経験・能力・設備・情報・人的関係等まで探索し、対象事業との関係から強み・弱みを再評価する。

したがって、本研究における強み・弱みは固定的な人物・企業属性ではない。対象となる新規事業が変われば、同じ資源の意味も変わり得る。

3. 多面的な資源棚卸し

本研究では、事業資源を職歴や資格だけに限定しない。最終試作版では、職歴、国家資格、公的資格、民間資格、国際資格、人的資源、物的資源、財務資源、情報資源、組織・社会資源の10カテゴリを対象としている。

これらを合わせて933候補行を設定しており、重複する名称を除くと923項目となる。ただし、項目数の多さそのものを研究成果とは位置づけない。

目的は、本人が「これは自分の強みではない」「これは普通の経験である」と認識しているものまで、事業資源として検討可能な範囲へ引き上げることにある。通常の職務経歴書では直接表現されにくい、背景や文脈を考える、問題の原因を分解する、複数の視点から比較する、一次情報と編集情報を区別する、過去の経験から共通構造を捉える、といった実務上の経験・能力も候補に含まれる。

これにより、一般的なプロフィールだけでは把握しにくい資源まで、新規事業との適合性を検討する材料として利用する。資源候補の全一覧、分類基準、追加・除外条件等は内部研究・運用ノウハウとして公開しない。

4. 分析支援システム

本研究では、資源棚卸しと新規事業との適合分析を、Excel・VBA・生成AIを組み合わせた分析支援システムとして試作した。

保有資源の確認 → 検討中の新規事業の入力 → 両者の関係を生成AIで分析 → 強み・弱み・関連性等を整理

Excelには、新規事業として「何をしたいか」を入力する領域に加え、その構想が生じた理由や背景を整理できる領域も用意している。一方、現行の主たるAI分析は、確認された保有資源と検討中の新規事業との適合関係を中心としている。

試作システムでは、強み、弱み、対象事業との関連性、関連する理由、事業化に向けた方向性等を整理する構造を設けている。また、保有資源から別の事業方向を補助的に提示する機能も実装しているが、本研究の主目的は新規事業案そのものの自動生成ではない。

中心となるのは、クライアントがすでに検討している新規事業に対して、何を持っており、何が使え、何が足りないのかを整理することである。

具体的な分析手順、評価条件、プロンプト、出力処理等は公開対象外とする。

5. サービス提供形態

本システムは、クライアント自身がExcelや生成AIを直接操作するセルフサービス型を前提としていない。FANDDFが必要情報を受領し、資源および新規事業情報を入力し、AI分析を実施し、出力内容を確認したうえで、分析結果としてクライアントへ提供するサービス形態を採る。

外部AIサービスを利用する以上、入力情報の取扱いには情報管理・セキュリティ上の制約が存在する。そのため、クライアントへAIの出力を直接委ねるのではなく、FANDDFが入力情報と分析結果を管理・確認する形としている。これはセキュリティリスクを完全に排除するものではなく、情報の取扱いと分析結果の品質を管理するための運用設計である。

6. 現在の到達点と限界

本研究では、単なる資源チェックリストを作成する段階から進み、確認された保有資源を、新規事業との関係から再評価し、強み・弱み・補完課題として整理する分析支援システムを試作している。

この点で、本研究は一般的な自己分析とは異なる。営業経験がある、資格を持っている、人脈がある、といった事実そのものではなく、それが対象となる新規事業で何に利用できるのかを分析対象とする。

一方、本研究には明確な限界がある。

- ・生成AIによる分析は確定的な判定ではない。
- ・保有資源との適合性が高くても、新規事業の成功を保証するものではない。
- ・市場規模、顧客の支払意思、競争優位性、法規制、必要投資、資金調達可能性等の事業成立条件すべてを本システムだけで検証するものではない。
- ・最終試作版に900項目を超える資源候補を設定しているものの、その項目数だけで体系の網羅性や分析妥当性が保証されるものではない。
- ・本システムは、案件ごとに必要情報を整理し、その都度生成AIへ入力して分析する方式であり、案件データの永続的蓄積、案件横断での自動比較、過去案件の自動検索・再利用、継続的な自動更新等を目的としたデータベースシステムではない。

分析結果は、「この新規事業は成功するか」を判定するものではなく、「この新規事業を実行する際に何を活用でき、何を補う必要があるか」を考えるための判断材料として位置づける。

7. 結論

本研究の目的は、「あなたの強みは何ですか」と尋ね、その回答を整理することではない。また、「この人に向いている新規事業を AI に考えさせる」ことでもない。

まず、本人・企業がすでに保有している可能性のある資源を、多面的な候補から確認する。そのうえで、検討している新規事業に照らしたとき、その中の何が実際に強みとして利用でき、何が不足しているのかを分析する。

研究の中核：強み・弱みを本人の自己認識から定義するのではなく、新規事業と保有資源との適合関係から再評価する。

この方法によって、本人がこれまで強みと認識していなかった経験、技能、情報、人脈、設備等が、新規事業における実行資源として再発見される可能性がある。生成 AI は、多数かつ性質の異なる保有資源と対象事業との関係を整理する分析補助手段として利用する。

本研究は、クライアントが検討する新規事業について、多面的な保有資源から強み・弱み・補完課題を整理するための応用研究および分析支援システム開発として位置づけられる。

研究開発ステータス

APPLIED RESEARCH / PROTOTYPE DEVELOPMENT | 応用研究／分析支援システム試作

日付・初出管理

基礎理論・研究思想初出：原資料の作成履歴確認後に確定

研究着手日：原資料の作成履歴確認後に確定

基礎資料初出：原資料の作成履歴確認後に確定

個別研究・仕様初出：原資料の作成履歴確認後に確定

主要正本・現行参照 Version：棚卸_プロンプト生成付き_交点出力追加.xlsm

研究概要初版：2026 年 8 月 19 日

日付は、原資料から確認できる事実のみを採用し、推測では補完しない。

更新履歴

Version 1.0 | 2026 年 8 月 19 日

クライアントが検討する新規事業について、職歴・資格だけに限定しない多面的な保有資源を棚卸しし、対象事業との適合関係から強み・弱み・補完課題を整理する研究と、Excel・VBA・生成 AI を用いた分析支援システム試作を公開版 Research Overview として整理した。

理論的位置づけとして、企業内部の資源と事業上の競争力との関係を扱う資源基盤視点（Resource-Based View）との親和性を示す一方、RBV・VRIO をそのまま実装したものとは位置づけない。

公開版では、研究目的、多面的資源棚卸しという考え方、事業適合性による強み・弱みの再評価、分析支援システムの役割、サービス提供形態および限界までを示す。一方、資源候補の全一覧、分類・選択条件、分析ロジック、事業適合性の具体的な評価方法、AI への具体的指示、内部プロンプト、出力処理、個別クライアントの入力内容・分析結果等、同一の分析体系を再現するために必要となるノウハウは公開対象外とする。